# Ｂｅａｒ　ｏｆ　Ｌｏｖｅ

維月十夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｂｅａｒ　ｏｆ　Ｌｏｖｅ

【Ｎコード】
Ｎ１９７２Ａ

【作者名】
維月十夜

【あらすじ】
すべての者の出逢いに、一つも偶然などない。あるのは、必然だけ。霊域の森の番人である狼――彼はある雨の日に、行き倒れの少女を拾った。余命幾ばくかの薄幸な少女と、霊域の番人である彼との切ないふれあいを描く交流記。

## プロローグ（前書き）

どうも、維月です。
久し振りに新たなものを書いてみました……。
面白くないかも知れませんが、そこは慈悲の心でお願いします。
それでは、失礼致します。

# プロローグ

すべての者の出逢いに、一つも偶然なんてない。
たとえ、出逢った相手が、人間(ひと)じゃなかったとしても。
そう、思いたい……。

私は、逃げてしまいたかったのだ。
残った時間が短いのなら、できるだけムダにしたくはない。
黄昏時の、森の中。
白く、無機質な空から、ぽつりぽつりと雫がこぼれる。
それは、やがてすぐに小雨となって、次第に強さを増していった。
その土砂降りの中、ぬかるみに横たわる少女が一人。
乱れた髪から覗く顔色は、蒼白を通り越して真白く、長いこと雨ざらしにされた彼女の体は、まるで氷のように冷え切っていた。
しかし、彼女に全く意識がないというわけではない。
(体が……いうことを利かない)
伸ばされた細い手は、きつく泥を握りしめた。
ただ、自由が欲しかった。
あの白い部屋から、逃げ出したかっただけなのに。
「こんな……筈じゃ、なかったのに」
少女は、虚ろに呟いて、静かに意識を手放した。
頬を一筋、涙が伝い落ちて、散った。
雨音が、より一層強みを増していく。
――と、雨滴を含んだ柔らかな草を踏む足音が、少女の前で動きを止めた。
「人間の……女!?」
足音の主は、少なからず驚いたようだ。
ここに、人間が来ることなど、今までに一度もなかったのだから。
そして、物語は――――ここから始まる。

## 禁忌（前書き）

霊域の森の番人である狼-――-彼はある雨の日に、行き倒れの少女を拾った。
彼女を助けたい。しかし、それは森の掟に反すること、霊域の森の番人である責務を忘れることだ。
彼は、葛藤を強いられる。

# 禁忌

「なんで人間がここに……！？　結界が破られるなんて、まさか」
少女の傍を、大きな銀狼が決めかねるように、しきりにうろついていた。
「魔力や、呪力の類は感じられないが、さて……どうしたモンか」
（このまま、放っておくのもどうかと思う……ここであったのも、なにかの縁かもしれん。弔いくらいはしてやろう）
「女……まだ若いというのに、残念だったな」
鼻面をそっと押しつけてから、銀狼は一つ身震いをして、その形を変えた。
するすると、狼の姿が解けるようになり、一瞬後には銀髪の、しなやかで凛々しい青年が現れた。
彼は、ふと小さな息づかいを捉えて、少女の背を抱え起こす。
少女が、息を吹き返したのだ。
「生きてるんだな！　よかった。どれ、ここでは寒かろう……場所を移らねば。ここに来た人間は、そなたが初めてだ、必ず助けてやる。だから、もう少しだけ頑張れ」
銀の髪の青年は、そっと少女を抱き締めた後、抱え直し、再び濃くたちこめ始めた霧の中に消えて行った。

これは、禁忌だ。
死に行く者は、そっと見送るのが森の掟。
消えかけている命に、手を差し伸べる。
これだけは、してはならない。
あの少女を見た瞬間、その顔があまりにも悲しすぎて。
霊域の番人である責を、一時だけ忘れてしまった。
気をつけなければ、気をつけなければいけない！
こんな事は、あってはならないのだ。

けど、それが分かっているのに……放っておけなかったんだ。

# 出逢った2人（前書き）

霊域の番人である人狼・凍夜（とうや）は、ある雨の日に行き倒れの薄幸な少女・香音（かのん）を拾った。
富豪の一人娘である香音は、病弱なために幽閉生活を送ってきたが、余命幾ばくもないと知って、そこから脱出。
薄幸な香音と、霊域の番人である凍夜の切なく淡い恋を描く、交流記。

## 出逢った2人

洞窟の壁に、松明の影が揺れている。
奥に敷かれている干し草の上に、少女が横たわっていた。
（温かい手……頭を触っているのは、誰？）
冷たく冷えた髪を、宥めるように、大きく温かな手が往復している。
心地よい、安心するの。
もっと、もっとして。
少女は、無意識に温もりを求めて、うっすらと目を開けた。
「よかった、気がついて……ずっと目覚めないから、どうかしちまったかと思ったよ」
（え？　えぇ？）
少女は、ぱちんと一つ瞠目をして、目の前で微笑む銀髪の青年を見た。
「あなたは……だぁれ？」
寝ぼけ眼を擦りながら問う少女に、青年は大げさに腕を組んでから、唸って見せた。
「誰と聞かれてもなぁ、まぁ……今言えるのは、この森の番人ってとこかなぁ」
青年は、困ったように頭を掻いてから、真っ直ぐに少女の方を見る。
言葉が続かない……。
今までに、人間と話したことなど、数えるほどしかない上、異種族とはいえ、年若い女性である。
無音の空白に慌てた彼は、あわあわとしながらも、なんとか話題をひねり出した。
「その、聞いてもいいかい？　なんで、あんな場所にいたんだ？」
---ふと、少女の表情が悲愴に翳ったのを、青年は見逃さなかった。
「自分が……もう、そう長くないのは分かってるの。だから、今の

うちに少しでも世界を見ておこうと思って。助けてくれて、どうもありがとう。あたし、香音というの、柊香音（ひいらぎ・かのん）」
「……柊？　この崖上のお屋敷だろ？　そこの家に娘がいたなんて、初耳だな」
青年は、香音の隣りに座ると、興味深そうに顔を覗き込む。
「そう……お父様は、あたしを一度も表に出したことがなかったんですもの、知ってるはずないわね」
諦めたように笑った香音に、青年は、ちくりと胸に障（つか）えを感じた。
あの顔だ。
自分が、彼女を初めて見つけたときと同じ表情（かお）なのだ。
「さっき、大分咳き込んでたな。ほら薬だ、飲め」
青年は、枕元に置いていた木製の器を、香音に渡した。
中身は、霊草を煎じたものが入っている。
「お茶みたいな色……苦い」
少し口に含んでから、香音は、思いきり渋面を作った。
「薬だからな、甘くはないぞ？」
香音は、薬をすべて飲み干してしまうと『ほぅ』と溜息をついた。
「あたしが今まで飲んだ薬は、全部甘かったわ？」
「そうか……今のやつはな、この霊域（あたり）にしか生えない薬草を煎じたもんだ。どうだ？　体、もう苦しくないだろう」
そう言われて、香音は何度も浅く息を吐いてみる。
不思議なことに、彼の言うとおり、体からは一切の不快さがなくなっていた。
「ホントだ……苦しくないみたい。あなた、お医者なの？すごいわっ」
にっこりと笑みを咲かせた香音に、青年は照れたように頬をかいた。
「大したことないさ……それより、よかったな？楽になって」
「まだ、やりたいことがあるもの、そう簡単には死ねないわ……なんだか勇気が出た、あなたのお陰ね」
見ちがえたように微笑んだ香音に、青年は眩しそうに目を細めると、

背中を向けて言った。
「そりゃあ、良かったな。雨が止んだら、森の出口まで送る」
「戻りたくなんかない」
ぽつりと、しかし断固として言った香音に、青年はハッと振りかえる。
「戻ったら、もう二度と外には出られなくなるわ……それなら、死んでしまった方がいくらかマシよ」
言った彼女の瞳には、大粒の涙が浮いている。
「そんなこと、言うもんじゃないぞ？　言霊ってのがあるんだから、むやみに闇の言葉は言うんじゃない」
ばふばふと、小さな頭を撫でられて、香音は涙を拭いながら頷いた。
「不思議な人ね、あなた……ねぇ、名前を教えて？」
「あれ？　まだ教えてなかったか、俺は凍夜（とうや）っていう」
そう言って、凍夜はアイスブルーの瞳をしばたかせた。
「凍夜は、ここに一人で、なにをしてるの？　家は、どこ？」
香音は、不思議そうにあたりを見まわしている。
知りたがりな年頃なのだろうが、凍夜はそれ以上のことを話さなかった。
「雨、止んだみたいだな……送ってくよ」
ゆっくりと重い腰を上げた凍夜は、そっと香音の手を取って立たせてやる。
その瞬間、香音がサッと顔を赤らめたのに、凍夜は気づかなかった。

雨上がりの森の中を、足早に凍夜は歩いていく。
それに、数歩遅れて付いてくる香音を振り向きながら。
「ねぇ凍夜、よかったら、友達になってくれないかしら？」
「……」
それに、凍夜は応えない。
応えるのには、相当の気骨がいるからだ。
助けたとはいえ、そう簡単に気を許してはいけない。

自分には、やらなければいけないことが‐――‐霊域の森(ここ)を守るという責務が。
「ダメ？」
森と外界の境に着いたとき、凍夜はぴたりと足を止めた。
「個人的にいやではないが、もうここには近づくな。それが、そなたの為でもある」
「よく、分からないけど……友達になってくれるのね、嬉しいっ」
思いきり笑顔を咲かせた香音に、凍夜は面食らって一つ瞠目をする。
「と、とにかくだ……今は早く戻った方がいい」
「うん、いやだけど……またね」
小走りに、走り去っていく香音の背中を見送る凍夜の顔は、これ以上ないと言うほどに真っ赤だった。
「俺、やばいかも……香音、可愛かった」
ぽつりと呟いてから、凍夜はさらに赤くなる。

なにかが、変わっていく……そんな気がした。
霊域の森の番人である自分が、人間の少女に懸想するだなんて。
今までには、あり得なかったこと。
これは禁忌だ‐――‐それが分かっているのに、まるで痺れたように思考が働かなかった。

## 代償（前書き）

霊域の森の番人・凍夜は、ある雨の日に行き倒れの少女・香音（かのん）を助けた。
そんな凍夜は、香音に生涯一度の恋をした。
凍夜は、責務を果たすべきか、恋を選ぶか葛藤する。
彼は、結局どうするのか、なにを選ぶのか。
余命、幾ばくもない薄幸な少女・香音と霊域の番人である彼との切ない交流記。

# 代償

薄暮れの森の中に、火が走る。
火、といっても、決して火事のように大きなものではない。
鬼火だ。
今宵は上弦月‐――‐‐現世(うつしよ)と黄泉の境がなくなる晩。
上弦月の晩には、年に一度の祭りがある、異形たちの祭りが。
この鬼火は、その為の知らせなのだ。
霊域の番人である、凍夜の元にも知らせが届いた。
「ったく、そんな気分じゃねぇのになぁ」
霊域の森の最奥にある、古木の根本に伏せていた凍夜は、ゆっくりと重い腰を上げた。
月明かりが木々の狭間を抜けて、照らされて仄白い地面に、ストライプを映している。
月を見あげてから、そっと歩き始めた凍夜の姿がするすると変化していき、映された影がの伸びあがる。
一瞬間のうちに狼ではなく、銀の髪の青年に変わった凍夜が、そこにいた。
ゆるく吹いた夜風に、背中までである銀髪が鮮やかに閃く。
「あの魔女なら……どうにかしてくれるかも、知れないな」
思い詰めたように呟く凍夜。
凍夜はあの日の別れ際、きれいに笑った香音が、忘れられずに悩んでいたのだ。
自分は、霊域の守護をする者‐――‐‐――人と関わり、あまつさえ恋をしてしまうなど、以ての外だ。
分かっているのに、分かっているのに思考が利かない。
果たすべき責務か‐――‐‐恋か。
どうすればいい？
‐――‐分からない。

本当に、どうすればいいのだろう。
行って、教えてもらえるのなら、そうしよう。
止められない想いを、どうすべきか。
魔女なら、それが分かるかも知れない。
案内の鬼火が、肩に揺れている。
それは、まるで『おいで』と優しく、妖しく誘うように。
――――行こう、魔女の元へ。
森の中心には湖がある。
鬼火は、消えることなく、真っ直ぐに水面に吸い寄せられると、凍夜を巻き込んで消えた。

湖に入ったならば、当然のことで息が苦しくなるだろう。
しかし、この湖だけは例外だった。
ここに、水は存在しない。その代わりにあるのが、外界では湖であり、また、通路の役割も併せ持つ、魔女の空間へと繋がる唯一の道なのである。
門である湖をくぐった先で、鬼火はふわりと揺らいでから、中庭に佇む女性の手のひらに留まった。
光の粉を散らして飛んでゆく鬼火に、凍夜は静かに付いていく。
「ようこそ、凍夜……待っていたわ」
女性が、くるりと振り向いて、薄く笑う。
柳腰で、足元まで漆黒の髪を流した彼女こそ、この空間の主人(あるじ)である魔女・ライカ＝グロリアだ。
「……教えてくれないか、ライカ」
「代償として、それなりの『なにか』をもらえるなら」
なにを、とも問わず、ライカは俯きがちに呟いた凍夜に言った。
「ならば、これを」
凍夜は、掌(てのひら)に握りこんだ物を、ライカの手のひらにのせた。
手のひらに乗ったそれは、さりさりと銀の光をこぼす。
「あなたの、牙のようね……使いである人狼の牙で霊力の源、たし

かに受け取ったわ」
「こんなモンでよければ、いくらでも。それより頼むライカ、教えてくれ！　俺は禁忌を犯しているんだろうか？」
「……恋をしたのね、凍夜。そう、相手は……この娘なの」
ライカは、しばらく黙ってから、そっと呟く。
ライカの左腕にある水晶の釧（せん）が赤く輝き始め、まるで陽炎のようにその姿を映し出す。
ベッドに横たわる香音は、ひどく辛そうで、荒い呼吸を繰り返しては、譫言のように凍夜の名を呼んでいた。
「香音、苦しいのか、しっかりしろ！」
「ムダよ、届かないわ」
必死に、映し出された幻に話しかける凍夜に、ライカは窘（たしな）めるように言う。
「この子は、もう幾ばくも余命が残っていない。残念だけど、この流れは変えられない……変えてはならない」
「いやだ！　そこを、どうにかしてくれっ……掟破りなのは分かっている、愚かな俺の命に免じて、頼まれて欲しい！」
凍夜は、血が滲むほど、きつく拳を握りしめて魔女・ライカの足元に跪いた。
「って、いつもなら言うわね。いいでしょう、代償も受け取ってしまったし……叶えましょう」
「ホントか！」
「リスクがある、それでも、いいのね？」
パッと顔色を変えた凍夜に、ライカは鋭く人差し指を突きつけて、宣告した。
「リスク？」
「あなたの正体が、この子……相手に知れたとき。その恋は終わる、それが条件よ」
「なっ！？　そんなっ……い、いや、頼む、やってくれ」
目を剥いて、身を乗り出す凍夜。しかし、射抜くような、それでい

て見透かされるようなライカの瞳に気圧され、静かに再び頭を垂れた。
「その願い、たしかに承ったわ……凍夜、あなたはそろそろお戻りなさいな。もうじきに夜明けよ」
「そうか……ならば戻ろう、頼んだぞ、ライカ」
「ええ」
凍夜は、門を潜った。
魔法陣が輝いて、一瞬間のうちに、光の渦が凍夜を包んでしまった。

　柊邸の最奥‐――‐――香音の部屋。
殺風景な間取りの、海の見える窓際のベッドに、香音は一人横たわっていた。
部屋の白い壁に、月光に照らされた海の色が移って揺れる。
ふと、眠る香音の傍に、ふわりと金色の蝶が舞い降りた。
‐――と、蝶の形がするすると解け始める。
闇の中に、光の粉を散らしながら、艶やかな黒髪が揺らめいた。
ライカだ。
ライカは、くるりと踵をきって舞う。その度に、銀の光がサラサラとさんざめく。
「これで……あなたは自由になるわ。それが幸か不幸かは、あなたが決めるのね」
眠り続ける香音から、黒い煙が上がる。
それは、くるくると毛糸でも丸めるかのように、ライカの手の中に収まった。
黒い煙は‐――‐――香音の中にあった、邪気…病魔なのである。
「形ある者は、いつか必ず、崩れるが定め……長らえた今を、大事に生きなさい」
そう告げて、ライカはいつの間にかに、跡形もなく消えていた。
枕元に残された、凍夜の牙のネックレスが、どこか寂しげに輝いていた。

## 代償（後書き）

ご無沙汰しておりました、こんにちは、維月十夜です。
『Ｂｅａｒ　ｏｆ　ｌｏｖｅ』も第４部となりました。
書いていて、はっと気づいたことは……同じなんです！
私の名前と、彼、『凍夜』の名前の響きがっ。
のぁ～っ、何て失態をっ（Ｔ＿Ｔ）
書いていて感じた違和感って、これだッ丹だぁ……くすん。
ここまで読んでくださった読者さま方には、感謝感謝です。
これからも、精進して参りますので、是非謁見の程を。
長文失礼致します、それでは。

## 夢一夜（前書き）

霊域の森の番人・凍夜。凍夜は、ある雨の日に森の中で行き倒れていた余命幾ばくもない薄幸な少女・香音を助けた。
2人は次第に惹かれ合うようになり、逢瀬を重ねる。
二人の恋は、実るのだろうか？
『維月シリーズ』の最新作！

## 夢一夜

『信じられない！』その一言が、香音の部屋をひとしきりに揺るがせた。
ベッドには、半身を起こしている香音。その脇には、同じく眉間に皺を寄せた香音の父と、彼女の主治医が座っている。
「まったく以(もっ)て信じられません！　あんなにも重症だった筈なのに、今は本当の健康体です」
「まぁ……よかったではないか？　病気さえ治ってしまえば、柊家(ウチ)も安泰だ」
「ふふっ、会えなくなって残念だがね、香音ちゃんが健康になれてよかった……また、何か聞きたいことがあればいつでも呼んでください」
「ああ、頼むよ」
和やかに談笑する二人には分からぬように、香音は眉間に皺を寄せ、それから窓の外に広がる滄海を見た。
（なによ、それ……『治って欲しくなかった』みたいな言い方しなくたっていいじゃない。結局、籠の中の鳥には、変わりないんだわっ）
花が咲くのも、鳥が啼くのも－－－－－一瞬の命。
ああ、凍夜に逢いたい。
今すぐ、逢いたい。
また、いつ散ってしまうか知れない命が、散ってしまわぬうちに。

一方、あれきり一度も、森に来なくなった香音を想いながら、凍夜は青草の海に大の字で寝転がっていた。（人間の姿で）
『もう来るな』と言ったのは自分なのに、想えば想うほどに逢いたくなる……これが、恋というものなのか。
「凍夜、凍夜？」

空耳を、聴いた気がした。
ザァ……と、青草の海が、一頻りの風に逆巻く。
「香、音？　どうして、ここに？」
ああ、言葉がうまく出ない！
けど、それ以上に嬉しい。
香音が、逢いに来てくれたんだ……。
「逢いたかったの、すごく、すごく……そしたら、これが急に光り出して、ここに行けって、教えてくれたんだよ？」
香音は、胸元を押さえてネックレスを見せた。
ネックレスには、前にライカに渡した、自らの牙が光っていた。
「それ……」
それは、自分の牙だ。護りとして、傍につけた片割れ。
「キレイよね、これ……なんの石かしら？」
（あ、そうか……知らないんだったな）
ネックレスを、愛おしげに指先でまさぐる香音が愛しくて、凍夜はそっと彼女の頬にキスをした。（狼の姿でなら、『べろりん』ということになるが）
「きゃっ、とっ、凍夜ぁ！？」
「それ、よく似合ってる」
「あ、ありがとぅ」
トマトのように赤くなった香音を、凍夜はにこにことしながら見つめ続けた。

二人は、日が暮れても談笑しながら笑い合い、寄り添っていた。
「ねえ凍夜……あたし、叶うかどうか分からないけど、夢があるんだ」
「夢？」
首を傾げてみせると、香音は嬉しそうに、しきりに頷いた。
「うん、あのね？　大好きな人と結婚して、その人の赤ちゃんを産んで、お母さんになるの！」

「んぶっ！？」
突拍子もない、香音のトンデモ発言に、凍夜は思いきり赤面してしまった。
「おっ、おいおい……今、いくつだ？」
「あらぁ、あたしもう１８よ？　そう言う凍夜こそ、いくつなの？」
ぷぅ、と頬を膨らます香音。
「……１９」（本当は１９の後ろに『０』が付くんだけどな）
う……嘘をついてしまったぁ！？
本当の年なんか、とうに憶えていないのに……。
「ふーん、ねぇ凍夜……これからも、こうして一緒にいられるといいね？」
ことん、と肩に頭を凭せて、香音は目を閉じると、それきり静かになった。
どうやら、眠ってしまったようだ。
「ホントは……もっと前にも、出逢ったことがあったんだよな」
本当に、始めの出逢いは－－－－－今から１０年前。
『今は、これしかできなくて……ごめんね？　ごめんね？』
猟銃で撃たれ、横たわっていた狼姿の凍夜の傍に、畏れもせずに近寄ってきた少女が、香音だった。
本当は、半時も黙っていれば傷は塞がるのだが、わざわざハンカチで手当てをしてくれた、小さな彼女の心遣いが嬉しかったのを、今でもよく憶えている。

「……ん」
時々僅かに身じろぐ香音の頭を撫でながら、凍夜は、ふと夜空を仰ぎ、遠い目をする。
香音は、完全に自分を人間の男だと信じ込んでいる。
騙しているんだよな……彼女を。
そう思う度に感じる、果てない罪悪感。
しかし、それにどこか安堵してしまう自分もいる。

『正体さえバレなければ、彼女の傍にいられる』と。
なんて、都合のいい男だろうか。
そんな狡い自分が、腹立たしくて仕方がない。
「うん……とぉや、どこ？」
「香音……お前は、俺の正体を知ったら、どうするんだろうな？」
うにゃうにゃ、と寝返りを打つ香音に問うように囁いてから、凍夜は痛々しく微笑んだ。
人間（ひと）や、他の獣とも違う、自分の寿命。
人の命など、自分にすれば泡沫のような物だ。
分かっているのに、それが愛しい。
儚い－－－－だからこそ、愛おしいのだ。
「ひどい男だよな、すまない……香音」
人間の生は、絶えず散りゆく桜のようだ……。
儚きものよな、悲しき人間の命よ。
凍夜は、その儚い一片一片を逃さんとするように、香音をやんわりと、しかし強く抱いた。
どうしても、散りゆくのを止める術がないというのなら－－－－せめて今だけ、今だけはこのままで。
せめて、一夜の夢として刻ませておくれ。
花が咲くのも、鳥が啼くのも一瞬の命－－－－お前の嘘に酔いしれている、腑に落ちない恋。
せめて－－－今だけは……。
「香音っ、愛してるっ－－－－愛してる！！」
時よ、どうか……このままでいて。

## 夢一夜（後書き）

どうも、こんばんは。維月です（^―^）
次第に秋深まる今日この頃ですが、この作品の中ではまだ夏です。
（笑）
それにしても、凍夜……感傷に浸ってますねぇ。
香音のトンデモ発言、ちょっときわどいかも？
次回、ますます絆深まる二人……の予定（汗）
興味がおありでしたら、是非謁見の程を。
ここまで読んでくださった、読者さま方には感謝以外の何者でもありません。
それでは、今日はこの辺で失礼致します。

**Two people in the rain-――本当に大切なのは、なに**

霊域の森の番人である人狼・凍夜は、ある雨の日に行き倒れていた、
余命幾ばくもない薄幸な少女・香音を助けた。
惹かれ合う2人……しかし、ある日香音に見合い話が。
果たして2人の恋は、実るのだろうか？
『維月シリーズ』の最新作！

## Two people in the rain-――本当に大切なのは、なに

鈍色の空から、銀の糸が降っている。
そんな天気は、悲しげに曇った空がこぼす、晩夏の雨。
香音は溜息混じりに、視線を、大理石のテーブルに堆(うずたか)く積まれた見合い写真に向けた。
父曰く、自分は柊家の一人娘……以前なら、病のせいで諦めていたが、全快した今ならば、早く婿を取らせるつもりらしい。
結局、抵抗はことごとく受け入れられなかった。
あたしは嫌なのに、他に、愛する人がいるのに……。
見知らぬ男の妻なんかに……なりたいわけがない！
凍夜-――-――。
居間の窓際に、頬杖をついていた香音は、窓の外に佇んでこちらを見あげる凍夜を見つけ、慌てて雨の中に走り出していった。
「凍夜っ、凍夜！」
「っ……香音」
香音は、雨が全身を叩くのも構わずに、きつく凍夜に抱きつく。
力強く、抱き返してくれる彼の胸に寄り添いながら、香音はそっと目を閉じた。
「会いに来てくれたの、初めてね？　嬉しいわっ」
「しばらく、顔出さなかったから……体壊したのかと思った。けど何ともないみたいだな、よかったよ」
「凍夜……」
このままでは-――-――-彼との逢瀬も、今日が最後になってしまうかも知れない。
そんなのは嫌だ、絶対にあって欲しくない。
どうすれば……ずっと彼の傍にいられる？
彼の……凍夜の傍に、ずっといたい。
「凍夜、逃げて」

香音が静かに呟くと、びくりと凍夜が震えるのが分かった。
「いいのか？　ホントに」
意味が分かったのか、驚いたアイスブルーの瞳がじっと香音を見つめる。
「……どうしてって、聞かないのね？」
俯いた香音を、さらにきつく抱き締めてから、凍夜は儚く微笑んだ。
「聞いて欲しいんだな」
凍夜は、こくりと頷いた彼女の頭を、優しく撫でてやる。
「お父様が、あたしにお見合いしろって、写真ばかり持ってくるの。そんなのごめんよっ、あたしは……凍夜が好きなのにっ」
「香音」
その時、香音の目が大きく見開かれた。
凍夜が、香音の唇を奪ったからだ。
「愛してる」
「……え？」
香音は、ややしばらく、状況が理解できていなかった。
「俺も嬉しい……香音、一緒になろう。必ず迎えに行く、だから待っててくれ」
香音は立っていられずに、ぺたんと座り込んでしまった。
雨の中を、走っていってしまった彼を見送る香音の頬は、夜目にも赤い。
「夢かしら、これ……ううん、それにしてはできすぎてるもの。でも嬉しいっ」
その後、ずぶ濡れで騒いでいるところを、用事から戻った父親に見つかって酷く叱られても、ちっとも悲しくなかった。
窓の外の雨は、いつの間にか止んでいた。

一方、霊域のすみかに戻った凍夜も、同じように騒いでいた。
「言っちまった、遂に言っちまったぁ！　ホントに、香音が妻になるんだ～～っ」

霊域の森の最奥で、凍夜はぴょこぴょこと跳ね回る。
居候の、黒栗鼠（りす）に『やかましい！』と胡桃をぶつけられるまで、お祭り騒ぎは続いた。

幸せな未来がありそうな二人だが、その後に起きる悲しい事件を、まだ、知る由もなかった。

**Two people in the rain-――本当に大切なのは、なに**

こんばんわ、維月です。
『Ｂｅａｒ ｏｆ ｌｏｖｅ』新章です。
→題名の意味は、「忍び恋」と言う意味ですね。
難しくて済みませんです。（＜＿＞）
凍夜と香音、香音はともかくとして、凍夜！
クサいセリフを吐かせてしまいましたよ（汗）
こんな話ですが、読んでくださった読者様には感謝感謝です。
よろしければ、次回もご覧くださいませね。
それでは、失礼します。

## Ｄａｒｋ　ｈｏｗｌ－――闇の哄笑（前書き）

霊域の番人・凍夜はある雨の日に、行き倒れの少女・香音を助けた。
幸薄い彼女に恋した凍夜は、魔女・ライカに頼んで香音を助けて貰う約束をした。
約束通りに健康な体になった香音、しかし事態はそう甘くはなかった。
前途多難な二人の恋は、果たして実るのだろうか！？

## Dark howl-――闇の哄笑

柊家当主-――-――香音の父は不機嫌だった。
理由は当然……
どうにも、娘の様子がおかしいからだ。
始終、窓の外を眺めては、夢見るような表情(かお)をする。
恋だ。
彼の中で、鋭く警告が発せられている。
おそらくは、どこぞの馬の骨とも知れぬ輩に、恋でもしたのだろう。
だから、見合い写真を片付けたのか。
彼は「あれも死んだ妻に似て、強情なところがある」と半ば怒鳴るようにして言ってから、グラスのワインを一気に煽った。
「どうにかして、言うことを聞かせねばならん……だが、どうすればいい」
投げやりに呟いて、椅子にどかりと腰掛ける。その重みで、籐(とう)でできた椅子がか細く悲鳴を上げるが、そんなことはどうでもよかった。
どうにかしなければ。
このままでは、柊の血が途絶えてしまう!
(どうすればいい、どうすれば!)
グルグルと、思い悩んでいた彼の思考を途切らすように、耳元で、ひどく静かな声が囁いた。
「簡単ですよ」
聞き覚えのある声を聞いた彼-――-――当主は、びくりと背筋を凍らせる。
内側から鍵をかけた自室には、間違いなく自分一人の筈、外から鍵を開けなければ、入ってはこられない。
「お、お前は……どこから入ってきた!」
どもりながらまくし立てる彼に「いやぁ、心外だなあ」と愛想笑う相手。

その刹那に、ぴしゃりと短く、稲妻が嗤う。急な夕立が、一気に窓を濡らし始めた。
「娘の主治医が……何用だ。今日は呼んでいない、帰れ」
きつく怒鳴る当主を、さらりと受け流して、香音の主治医は、その顔に柔和な笑みを張り付かせる。
「気分を害されたなら謝ります……ところで、何かお困りのようですねぇ。私でよければ、力になりますよ？　さ、なにをお困りです、おっしゃってみてください」
主治医の瞳が、金色に妖しく光る。それを見つめていた当主の瞳は、すぐに焦点を失い、ぼんやりとなってしまった。
「う……じ、実は」
さんざめく稲妻によって、壁に映された主治医－－－－彼の影は、黒い獣のものとなって映し出されていた。
「そういうことか……娘を思う父親の情ねぇ、泣かせるじゃないか。けどまぁ……先（ハナ）から、お前なんぞに興味はなかったけどね。柊（ここ）家を手に入れれば、この地域一帯を手に入れられる、ただそれと、エサがいたから使わせて貰っただけさ」
そういうと、主治医－－－－－基い干渉者はニヤリと歪んだ笑みを浮かべた。
「さぁて、お前はもう、俺のカワイイ手駒……よぉく働いておくれ」

コンコン、と多少強く、香音の部屋のドアがノックされた。
「はい、お父様？」
ドアごしに尋ねると、父のくぐもった声が「そうだ」と応える。
「なぁに？　どうかしまして？」
「お前に客だ、入るぞ」
「ちょっと待って、誰！？」
制止も聞かずに、入ってきた父と来客に、香音は息をのんだ。
「やあ、香音ちゃん」
「せんせ！？　どうしたの？　わざわざ、会いに来てくださったの

？」
「お父様から、心配があるって聞いたから、慌てて駆けつけたんだよ。どうしたんだい？　心配って」
両手を強く握る主治医に、香音はきょとんと首を傾げた。
「ない、わよ？　心配なんて、ちょっと、お父様ったら、どうしたの？」
身に覚えのないことを聞かれ、香音は父の方を慌てて振り向いた。
「でも、心配だな……後から悪くなったりしたら困るだろ？　正直に言ってごらん？」
「な、ないです、本当に……ちょっとお父様、先生になんて言ったの！？　ねぇ、何とか言ってよ！」
「香音……ずっと言いそびれておったが、今からそ奴がお前の婚約者だ。いいな」
「ちょっ、ちょっと待ってお父様！　どうしたの？　なんで急に、そんなこと言いだすなんて、どうかしてるのはお父様の方だわっ！？」
尋常でない父の様子に、香音はなおも追いすがる。
「香音っ！！」
破鐘（われがね）のような声で怒鳴られ、香音はきつく身を竦ませた。
「後は勝手にしろ……儂は部屋に戻る」
乱暴に吐き捨てると、当主は壊れそうなほど勢いよく、ドアを閉めた。
「お父様もああ言ってることだし、ね？　香音ちゃん」
にっこりと笑いかけられた刹那、戦慄にも似た悪寒が、香音を鋭く貫いた。
怖い……。
怒ったお父様に怒鳴られた時とも違う、なにかが怖いんだ。
「どうしたんだい？　香音ちゃんは、俺が嫌い？」
じりじりと追い詰められ、香音は強く、主治医である彼を睨んだ。
「先生も、お父様も、なにか変よ……来ないでっ！」

香音は、迫る手から身を捩ると、慌てて窓の外のバルコニーに逃げた。
しかし、狭いバルコニー。簡単に追い詰められ、手が伸びてくる。
「やれやれ、面白いことをするねぇ」
一頻り、くつくつと嗤って香音をバルコニーの隅に追いやる主治医。
「さ、おいで？　いい子だから」
「やだ！　イヤったらイヤ――――！」
「ぎゃっ！？」
主治医が香音に触れた瞬間、青い火花が散り、彼の本性がさらけ出る。
「これは、結界！？　この気配は、霊域のっ」
赤い毛並みをした狼が、牙を剥いて、唸るように言った。
「先生が……狼だったなんて」
「ふん、その割に驚いてないじゃないか。え？」
座り込んでいる、香音と同じ高さに目線を合わせると、狼はニヤニヤといやらしく笑う。
「なっ、なによ……アンタなんか！」
ぷんっ、とそっぽを向いた香音に苦笑して、狼は形を人型に歪ませた。
「霊域の、確か凍夜といったか？　あんな小僧より、俺の方が数倍はいいオトコだと思うがなぁ」
「凍夜を悪く言わないで！　アンタなんか最っ低よ、顔も見たくない！」
そっぽを向いていた香音が、躍起になって反撃するのを見て、主治医は面白そうに口角をつり上げて笑った。
「気の強いことだ、ますます気に入ったよ。今は引くが、簡単に諦めたりしないぞ？　また来る」
そう言って、ひょいとバルコニーの手すりに留まると、香音の主治医だった男は、ふうわりと風に乗って、去っていった。
「バカ――――っ、もう来なくていいからね！　木にでも、

引っかかっちゃえばいいんだわっ」
香音の叫んだ『バカ』が、黄昏の空に空しく響く。
「騙されたお父様は仕方ないとして、あんなヤツ、今度来たら、ほうき持って叩きだしてやるんだからっ」
ぶんすかと、歩調荒く館を飛び出した香音は放たれた弾丸のように、まっすぐ霊域の森へと向かった。

夕刻の見回りをしていた凍夜は、呼ぶ声を聞いて、慌てて後ろを向いた。
「凍夜ぁ！」
勢いよく抱きついてきた彼女に、凍夜は数歩よろけてしまう。
「香音！？　何かあったのか？　どうした、まずは落ちつこうな」
「落ちついてなんてられないわっ、もう～……あいつったら、信じられない！　ずっと医者のフリして、あたしを騙してっ」
「医者？」
もの凄い剣幕に気圧されて、凍夜はおずおずと尋ねた。
「そう、ずっと掛かり付けのお医者で、色々とよくしてくれたんだけど……だけど、そいつ狼だったの！　凍夜の悪口言ったから、追い出したやったのよ」
瞬間、凍夜の片眉がぴくりと震えた。
「そいつ、赤毛じゃなかったか？」
「そうね……たしか赤毛よ」
「鬼灯（ほおずき）だ。西の森に棲む、性悪ナルシスト野郎なんだよ…あいつめ、俺の香音にちょっかいかけるたぁ、いい度胸じゃねぇか」
忌々しげに言うと、凍夜は香音を抱き寄せ、キスをする。
「やん……んんっ、凍夜ぁ」
「ここじゃ冷える、中に入ろうな。気づかないで悪かった」
香音は、きょとんと首を傾げた。
いつの間に家が建っていたんだろうか、こんな立派な家ならば、もっと早くに気づいたはずなのに。

目の前には、石造りの立派な家があった。
「おいで、香音……いつまで入り口に立ってるんだ？　冷えてしまうだろうに」
「あっ、うん……おじゃまします」
凍夜が、後ろでドアを閉めてから笑った。
「いらっしゃい、適当に座って、楽にしててくれ。いま熱いものを用意するよ」
くしゃくしゃと髪を撫でられ、香音は心地よさそうに微笑んだ。
「ありがと、待ってるわ？」

凍夜がキッチンに引っ込んでしまってから、香音は広い居間を、ぐるりと見まわした。
パチパチと、不思議な色の火花が爆ぜる暖炉の上、見たことのない古い絵画を見つけた香音は、ややしばらく絵に見入ってしまっていた。
（Ｉｆ　Ｉ　ｗｉｓｈ，ｓｈａｌｌ　ｗｅ　ｅｔｅｒｎｉｔｙ？－－望むのなら、永遠をあげましょうか？）
その時、香音の中に『声』が囁いた。
「えっ？　だ、誰！？」
しきりに辺りを見回してから、そこに自分一人しかいないことを思い出し、一気に青くなる。
「どうかしたのか？」
暖炉の前で固まっていた香音は、ふいにかけられた彼の声に、ゆっくりと肩の力を抜いた。
「ううん……ちょっと空耳を聞いたみたい、疲れてるのね、きっと」
「そうか、今日はもう遅いし、泊まっていくといい」
「とっ、泊まる？」
「あ、いや……その、深い意味じゃ」
ボフッと、沸騰した二人を、やかんの音が後押しした。

## Ｄａｒｋ　ｈｏｗｌ－――闇の哄笑（後書き）

こんばんわ、維月十夜です。
『ｂｅａｒ　ｏｆ　ｌｏｖｅ』新章のお届けです。
今回もまた、長々しいタイトルですみません（／｜；）
それにしても、ああ……穴があったら入りたい（汗）

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1972a/

Ｂｅａｒ　ｏｆ　Ｌｏｖｅ

2010年10月15日23時08分発行